

三河島水再生センター界隈の今昔

ここに一冊の本があります。小説の「彰義隊」（吉村昭著、平成十七年・朝日新聞社刊）です。著者の吉村は「あとがき」の冒頭で、『少年時代、上野の山に近い日暮里町の生家（旧谷中本村、現在の西日暮里一、二、六丁目）から、よく上野公園に遊びに行った。広大な谷中墓地を横切り、寛永寺の境内をぬけるのが常であった』と、回想しています。そして、この小説を執筆するようになったきっかけを次のように述べています。

『私は、荒川区立図書館に行き、ガリ版刷りの「三河島町郷土史」を手にした。簡易な郷土記録と思っていたが、宮がのがれた地の庄屋たちの朝廷軍に提出した届け書が多く記載され、それらは宮の動きをさとられまいとする村人たちの意図が透けて見え、郷土史としては予想外の傑出した内容であった。私は、その記録をもとに宮をかくまった家々の子孫の家を訪れて伝承を得、小説の執筆を決意した。』

そして、幕末の慶応四年に勃発した上野戦争に巻き込まれた、この小説の主人公である宮（東叡山寛永寺山主・輪王寺宮）について『宮は皇族で唯一の朝敵になった人です。どんな心情でその後を生ぎられたのか』との思いで、宮の生涯を追いかけるように史実を取材したとのことでした。

今回の職場界隈探訪は、この小説をガイドとして、上野公園から出発して、三河島水再生センター（荒川区、都電・荒川二丁目電停から徒歩一分）の界隈（三河島・町屋・尾久）の今昔を訪ねてみることにしました。

彰義隊と上野戦争

彰義隊は、第十五代将軍・徳川慶喜を警護するという名目で結成され、慶喜が上野の寛永寺の大慈院に謹慎・蟄居すると、慶応四年（一八六八）三月中旬、それまで浅草・本願寺に置いていた屯所から上野へ転じ、寛永寺を拠点としました。隊員は旧幕臣からなり、この頃には二千とも三千ともいわれる数に膨れ上がっていました。江戸城が無血開城し、四月十一日には慶喜も水戸へ去りますが、今度は、寛永寺山主の輪王寺宮を護ると唱え、引続き上野の山に立て籠もりました。

ちなみに、寛永寺は徳川家の菩提寺で、このときの山主・輪王寺宮は明治天皇の叔父に当たる人です。

ついに五月十五日、官軍と彰義隊が寛永寺境内において衝突します。これが世にいう上野戦争です。わずか一日で決着がつけました。それは、彰義隊の壊滅というより敗走でした。官軍は予め、上野の山の北側を包囲せず逃げられるようにしていたのです。輪王寺宮が落ちのびて行つた先は、寛永寺の寺領が多くあつた三河島方面でした。



▲ 東台大戦争図の部分
画 永島芳虎永島孟斎

この絵では、彰義隊が和装であるのに対して官軍は筒袖であり、官軍が鉄砲や大砲を用いているのに対し彰義隊の武器は刀というように対照的に描かれています。実際には彰義隊も旧式ながら鉄砲、大砲を使っています。この戦いで、寛永寺のほとんどの建物が焼失してしまいました。

輪王寺宮の潜行経路

目立たぬように同行者は数名の僧のみとして、輪王寺宮はいったん三河島村の伊藤家（寛永寺出入りの植木屋）で小休止した後、上尾久村の名主・江川佐十郎家へ向かいます。折からの雨で道が浸水していたため、宮は田舟に乗って移動します。土蔵の奥座敷で一旦休息しますが、官軍の追手のことを考え再び田舟に乗り、同じ村の遠藤治右兵衛門家に赴き、その納屋で一晩

を過ごします。その後、浅草の東光院を経て市ヶ谷の自証院へ。さらには遠く日光、会津へと潜行していきます。

この絵図の左下に、不忍池と寛永寺の正門の黒門が見えますが、その下の右に延びる広い道が下谷道です。三之輪小塚原を経て、隅田川に架かる千住大橋に至ります。また、不忍池の右上部には何も描かれていませんが、ここが寛永寺境内です。その空白部分から右方向へ辿る細い道があり、やや広い道と交差します。ここを左に折れて谷中本村、新堀村に入る道が伸び、さらに新堀村で右折して三河島村に抜け上尾久村へと続く道があります。これが、彰義隊が敗走したメインの経路だと考えられます。もう一つは、さきほどのやや広い道との交差点を曲がらずに真っ直ぐに三河島村に向かう道です。輪王寺宮の一行は、人目に付き難いこちらのルートをとったようです。

小説『彰義隊』に登場する三河島界隈

小説の「彰義隊」では、三河島界隈を次のように描写しています。まずは根岸の豆腐料理店「笹の雪」についてです。

『元禄三年（一六九〇）、後西天皇の第六皇子公弁親王が寛永寺山主に任ぜられ京をはなれる時、ひいきにしていた豆腐商玉屋忠兵衛に江戸にくるようになすめ、忠兵衛はそれにしたがって江戸に出た。良質な水を求めて寛永寺



▲ 下谷・谷中の図 部分（彰義隊とあらかわの幕末）

の周辺を探して歩き、日暮しの里と呼ばれていた新堀村の音無川のほとりに店をかまえた。江戸には珍しい絹ごしの豆腐を客に出し、公弁親王は笹に積もった雪のように白いとほめたたえて、「笹の雪」という店名をあたえた。そのようないきさつから「笹の雪」は、寛永寺に定期的に豆腐を献上し、輪王寺宮もその味を好んでいた。』

この店を過ぎた辺りの情景です。

『両側に、田畠が遠くまでつづくようになった。左手の谷中本村は土質が適しているのか良質の生姜を産し、採取期になると百姓たちが籠にそれを入れて寛永寺に持ってくる。宮は、それも好んで口にしていた。』

宮の一行は、道を真っ直ぐに進んで三河島村に入っていました。

『その地一帯は、梅雨期や二百十日前後の豪雨に見舞われる時期には出水するのが常で、どの家も三尺ほど盛り土した上に建てられていた。：根岸口から三河島村までは、一本道で、竹林坊も宮とその道をたどって三河島村にたどりついた。』

『（名主の）市郎兵衛は、即座に、「村内に宮地という地があり、そこに寛永寺お出入りを許されております植木職の伊藤七郎兵衛の屋敷がございます。そこは道からはずれておりまして、とりあえずそこにお移りになられたらい



▲ 観音寺

かがでしよう」と、言った。伊藤家の広大な敷地には、梅、松をはじめとした三千五百本の植木が植えられ、石灯籠も二十基以上ある。』

しかし、三河島村にとどまっているのは危険であり、一刻も早く他の地に移らなければならないことを悟ります。当主の七郎兵衛は使いを出して近くの観音寺の和尚に来てもらい、善後策を話し合います。その結果、ここは敗走してくる彰義隊員の姿が多く見られ、宮の所在が官軍に知られる恐れがあるということ、もつと奥まった地に移るようになります。

『北の方向二里の上尾久村に行き、名主の江川佐十郎方に宮をお移しすべきだということに話がまとまった。そこは隅田川に近く、氾濫した水が田畠をおおっていて、水の量も多いことが予想された。その地まで水の中を宮に歩いて行ってもらうわけにはゆかず、植木師の七郎兵衛が、小舟をひいてきた。その付近の大きな構えの家々には、出水の折にそなえて小舟が用意されていた。』

絶え間なく降っていた雨は、小降りになります。

『…前方に寺の屋根が見えてきた。満光寺で、そのあたりに人気はない。寺の近くを用心深く過ぎ、地藏堂のかたわらを通って阿遮院に近づいた。』

上尾久村の名主江川家に着き、宮は舟から降ります。

『水嵩は三河島より増し、宮は、腿のあたりまで水につかりながら佐十郎の案内で土蔵に入った。そこは一段高い位



▲ 満光寺

置にあつて、土蔵の中は浸水していなかった。』

しかし、ここも安全でないとみて午後十時を過ぎていたが、再び移動することになります。

『五月には三日、七日が曇天だけで終日雨が降りつづき、八日昼すぎから翌日にかけてあたかも滝水のような大雨となった。そのため田畠はすべて水に没し、川は増水して氾濫した。その後も、上野東叡山の彰義隊の戦いがはじまった十五日まで雨はやむことなく、大

出水となっていたが、その雨もやんでいる。』

『舟の後ろからついてゆく僧たちは、南の方向に眼をむけていた。火災は幾分おとろえをみせてはいるが、本坊と三十六坊の上あたりの夜空は、



▲ 下尾久石尊



▲ 阿遮院

息づくように炎で赤く染まっている。由緒ある寺々は、ことごとく焼け落ちていくにちがいがなかった。』

『上尾久村はほとんど田だが、下尾久村は畠が多く、それだけ水位が低くなっている。僧たちは膝のあたりまで水につかって歩いていった。』

途中の小さな農家（現在の東尾久六の三十一にある下尾久石尊の辺り）でのやりとりです。

『家の主（小原長兵衛）は、納屋はいかがと云って、案内した。粗末な小屋で、のぞいてみると、農具、肥桶、藁などが乱雑に置かれ、三尺（一メートル弱）四方の土間につづいて、九尺四方の板の間があるだけであった。やむなく宮を舟からおろし、宮は納屋に入って板の間に腰をおろした。：納屋はせまく、そこで宮に泊まっていたくわけにもい

かない。僧たちも疲労して、納屋に身を横たえる余地などない。』
 適当な隠れ家が見つからず、再び上尾久村に戻り、大百姓である遠藤治右衛門の家（かつての熊野の渡し・現在の尾久橋のたもと東尾久八―二十五の辺り）の納屋の二階で一夜を明かします。尾久ポンプ所のすぐ近くです。近年、尾久橋に平行して都営の日暮里・舎人ライナーが走るようになりました。供をしてきた僧たちは宮とも相談しつつ、浅草の東光院を目指すことに決めます。それは、『東光院の門前を通る道は、御成道と称され、寛永寺の山主が浅草寺におもむく折にその道をたどる。途中、東光院に立ち寄り、休息をし、昼食をとるのを習いとしていた。』からです。



▲ 輪王子宮が泊まった農家のあたり

屋ごろ、この家を出て水の中を歩き浅草に向かいます。

『下尾久村に入ると、背をかめて隅田川ぞいに進んだ。そのあたりは水嵩が増して、腿の付け根あたりまで水につかった。町屋村に入った頃、南の方角でつづいて発砲音がし、足をとめた。その方向には農家が寄りかたまっていて、藩兵が家々の探索をしていることはあきらかだった。：南の方向に、三河島村の農家がつらなっているのが見えた。：隅田川の河岸からはなれ、南の方へむかって歩いてゆく。：箕輪（三ノ輪）に入り：』

これは筆者の推量ですが、尾久の原公園の脇を通り尾竹橋のたもとから町屋ポンプ所の横を抜け、三河島水再生センターの辺りを突っ切って、その後は現在の正庭通とほぼ重なる道筋を辿って三ノ輪へ出たのではないのでしょうか。

『：太郎稲荷のかたわらを過ぎ、四方に眼をくぼりながら間道を進んだ。：日がかたむき、西日が水面を輝かせた。前方に多くの寺の屋根が見え、：寺と寺の間の細い道を進み、：一行は家並みの間を縫うように進んだ。あたりが薄暗くなり、寺町に入った。：広い境内の海禅寺の門の前をすぎ：小川にかかった橋を渡ると、左手の寺の裏にまわり足をとめた。：その寺は、浅草合羽橋の東光院で、：宮は、板の間にあがり、廊下を進んで奥座敷に入った。』

三ノ輪からは、ほぼ今の「かつぱ橋道具街通」の一つ西側に並行しているやや狭い道筋かと思われま

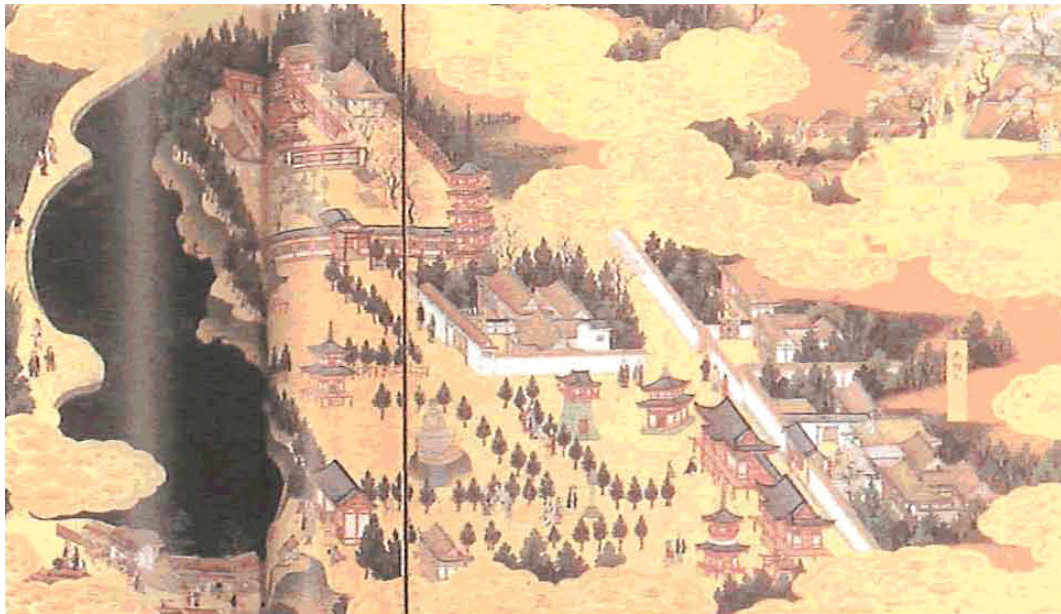


▲ 三河島汚水処分場用地
 （東京の下水道 100 年の歩み）

寛永寺

上野の山は江戸城から見て東北の方位にあり鬼門に当たることから、寺院を建て国家安全・武運繁栄を祈願することになり、二代將軍・徳川秀忠から寄進を受けた土地に、天海僧正が開山したのが東叡山寛永寺です。まず、寛永二年（一六二五）に本坊が、その後、諸堂宇、子院が次々に建立され、その境内は現在の上野公園の二倍もありました。東斜面には、三十六の坊屋が並んでいました。上野戦争の戦火で山内の寺々は焼け落ち、今に残る建造物はごくわずかです。場所は変わりましたが、旧本坊の表門が、東京国立博物館の近くにあり、戦闘の際の弾痕が表は丸い穴、裏は木目に沿って弾に剥ぎ取られ広くなって生々しく残っています。

明治八年、川越の喜多院にあった薬師堂を上野の山の北のはずれに移転して本堂とし、寛永寺を復興しました。天海僧正が喜多院から出た縁からだそうです。



▲ 江戸図屏風 の部分ビジュアル台東区史

江戸道

江戸時代末期、上尾久、下尾久、町屋を通り、三河島、根岸を経て日本橋に至る道があり、「江戸道（えどみち）」と呼ばれていました。輪王寺宮は、この道を逆に辿って潜行したものと考えられます。宮地の六地藏（荒川四の十）が、この道の脇に佇んでいます。永く地元や旅行く人々に安らぎを与えてきたことでしょう。

ここから、今では町屋銀座商隆会の商店街となっている、かつての江戸道を北に辿ると、輪王寺宮の一行が通った満光寺（東尾久三の二）や阿遮院（東尾久三の六）の脇に出ます。ここから先の江戸道は、筆者の推量ですが、現在の都電荒川線に沿って北西に延び、熊野前、宮ノ前へと辿る道筋とほぼ重なるのではないのでしょうか。



▲ 現在の江戸美智



▲ 宮地の六地藏

藍染川の分水路

六地藏の前を北にとり尾竹橋通に出てしばらく行くと、京成電鉄の高架線に沿った道路と交差しますが、この脇に「花の木橋」の橋標が保存されています。この道路は、三河島田圃を開削して大正七年に造られた



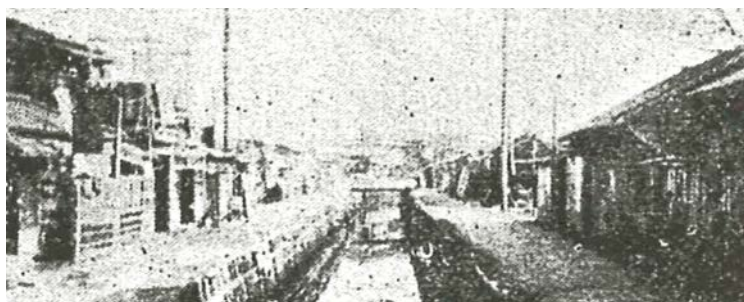
▲ 明治初期の三河島界隈 (荒川両眼一覽乃図)

藍染川(谷田川の下流)の分水路の水路敷だったのです。藍染川の本流を台東区内の初音町(旧町名)で分水し、西日暮里下まではトンネルで、その下流は開渠で、隅田川までの約三キロメートルを流れていました。この橋のほかにも「子ノ神(ねのかみ)橋」や「地藏橋」などが架けられていたそうです。

この分水路が下水道幹線となり覆蓋され、その上部が道路になったのは昭和三十五年になってからです。

三河島付近の鶴

かつて三河島から三ノ輪にかけては田圃が広がり所々に沼沢地が点在し、冬になるとナベヅルなどの鶴が飛来してくることで知られていました。明治初年までは鶴の餌付けが



▲ 開渠の藍染川の分水路 (東京の水道)

て、毎年十一月からの農閑期に竹の囲いを廻らして、朝と晩の二回、餌を与えていたそうです。



▲ 三ノ輪から見た三河島田圃 (歌川広重「名所江戸百景」)

荒木田の原

町屋駅前から尾竹橋通を少し北に辿ると、「荒木田」の交差点に出ます。この辺り一帯は、中世に「荒木田庄」が置かれていたところだそうです。江戸時代には、「荒木田の原」と呼ばれ、春ともなればスミレやレンゲが咲き乱れ、「江戸名所花暦」にも、

『荒木田の原、千住と尾久とのあいだの原、おびただしきすみれなり。前は川に臨みて絶景の地なり。春は遊客酒肴をもたらしきたって興ずること、日の西山に傾くを知らず』

とあります。この付近の畑土は「荒木田土」と呼ばれ、家屋の壁土として使用されました。

三河島水再生センターの旧唧筒（ポンプ） 施設が重要文化財に指定

平成十九年十二月に「旧三河島污水処分場唧筒（ポンプ） 場施設」が国の重要文化財（建造物）に指定されました。七十年以上も都民の衛生を支えてきたレトロな煉瓦造の施設が今後ともこの地に保存されることになったことは、下水道関係者として喜ばしい限りです。サクラやツツジなどの緑の木立を背景とし、チンチンと警笛を鳴らしながらこの施設をかすめて走る都内で一路線だけ残された都電を前景に、春夏秋冬とも一幅の絵となる産業遺産として、今後とも永く地元の人々とともに歩むことでしよう。



▲ 旧三河島污水処分場唧筒（ポンプ） 場施設と都電

参考資料（文中で明記したものを除く）

「荒川区史跡散歩」学生社

「荒川区の歴史」名著出版

探訪余話

日本下水文化研究会会報「ふくりゅう五十六号」の記事より、旧三河島污水処分場唧筒（ポンプ） 場施設の概要を紹介し、探訪余話とします。

『三河島処理場（旧三河島污水処分場、現三河島水再生センター）の建設工事が始まったのは、大正三年（一九一四）。主ポンプ室は大正九年（一九二〇）、その他の関連施設は翌年に、それぞれ完成した。運転開始は大正十一年（一九二二）。日本初の近代的な下水処理場が誕生したのである。当初は、碎石に下水を散水し空気中の酸素を利用する「散水濾床法」を採用したが、一九三四年には「活性汚泥法」に変更。以後、下水処理技術は格

（文責 地田）

段の進歩を遂げているものの、微生物によって汚れを分解するという意味では、大まかな流れは変わっていない。

三河島水再生センターの敷地内には、運転開始時に築造された「主ポンプ室」が、今も残されている。その際設置された大型ポンプや自走式クレーンは、当時の最新技術であり、大きな注目を集めた。それらの技術と同じくらい市民の関心を誘ったのが、ウイーン分離派の影響を色濃く残す建物だった。ウイーン分離派の活動は、英国のアーツ・アンド・クラフトやフランスを中心に花開いたアール・ヌーヴォーとともに、十九世紀末ヨーロッパのデザイン史を彩っているが、規則的に配置された「主ポンプ室」の柱型はそのまま近代化のリズムと呼応しているように見える。

この施設は、平成十一年（一九九九）まで稼動していた。休止後の平成十五年（二〇〇三）、「主ポンプ室」（正確には三河島処理場主ポンプ室及び関連施設）は、東京都指定有形文化財（建造物）に指定される。これは「稼動当初の構造を良くとどめ、近代下水処理システムの遺構として貴重であり、土木・建築技術の歴史の上で価値が高い」という評価を受けてのこと。さらに、平成十九年（二〇〇七）には、国の重要文化財（建造物）に指定された。どうしても、赤レンガ造の建物、つまり地上部分の「建築」に目が向いてしまうが、阻水扉室や沈砂池といった「構造物」、すなわち地下の土木・設備技術の体系もまた近代日本を支えてきた文化だということには留意しておきたい。「主ポンプ室」は、建築史のうえでも、下水道技術史のうえでも、大きなメッセージを発している建造物なのである。…』